

人物
紹介

子どもたちに「太鼓づくり」を通して、命の尊さを教える

「太鼓ができあがって、音を聞いた時、子どもたちの表情が豊かになります。かかわってよかったとつくづく感じる瞬間です」

1998年にリバティおおさか(大阪人権博物館)の「太鼓づくり講座」を受講した保育士から、「保育所で子どもたちに太鼓づくりを体験させたい」と相談を受けた。保護者でもあり、地域(貝塚市)の伝統的文化の「だんじり祭り」にかかわっていたことや、元来、木工など「ものづくり」が好きな性分も手伝って、「太鼓づくり」を短期間でマスターし、保育所で子どもたちに教えることになった。

「堅い皮を引っ張ったり、太鼓づくりには力がある」と、「父親の参加」にこだわった。父親を子育てに参加させたいというねらいもあったからだ。「父子(おやこ)で一緒に作った太鼓は父子にとって一生の宝物になります」

子どもが小学校へ入学。PTA副会長・会長を務め、学校週5日制導入後の土曜日の活動のために設けた「子ども広場」の取り組みの一つとして、「太鼓づくり教室」を開設。「太鼓づくりの輪」は小学校まで広がった。

自営で食肉業に従事している。子牛から育て、解体して、皮をはぐ。「その皮が太鼓になります。牛の命を人間がもらって、その命が音として生き返るわけです。また、命の音で言えば、太鼓の音は母親のおなかに宿っているときのお母さんの心臓の音、『母なる音』でもあると、太鼓づくりの時には子どもたちに常に話すように心がけています」

高校1年生の時から、部落解放運動に取り組んできた。教育・保育にかける情熱の原点は、自らの差別体験と差別に負けない子どもたちを育てたいという思いにあるという。

府内各地域の保育所や自治体などから「子どもたちに太鼓づくりを教えてください」との依頼が相次いでいる。公私ますます多忙になる中、「太鼓文化をどんどん広げながら、命の尊さも感じとってもらえれば…」と目を輝かせる。



きたで あきら
北出 昭さん

